

意識と内観

星 野 徹*

私は歯が痛い。私は歯が痛いことに気づいているのである。それでは、歯が痛いことと、歯が痛いことに気づくことは同じことだろうか。二つが別のことだとすれば、歯が痛いにもかかわらず、歯が痛いことに気づかない、ということもありうるのだろうか。また、歯に痛みがないにもかかわらず、歯が痛いと思ってしまう、ということもあるのだろうか。それらがありうることだとすれば、それでは、歯の痛みは何が加わることによって、私は歯の痛みに気づくようになるのだろうか。

I 意識の高階理論

意識とは、一階の心的状態に二階の心的状態が何らかのかかわりを持ったときに生じるものである、と考える哲学者たちがいる。たとえば、アームストロング(Armstrong, 1968)は次のような例を挙げている。

単調な道路を長時間運転しているドライバーは、ある瞬間、ふとわれに返り(come to)、これまで何十キロの間、自分が車を運転していると意識することなく運転を続けていたということに気づくことがあるだろう。運転しているという意識を持たなかったとはいえ、彼は、道路を見ていなかったわけではもちろんない。カーブでは適切にハンドルを操作し、赤信号ではブレーキを踏んでいる。だから彼は無事だったのである。ある意味においては、彼は、カーブや赤信号に気づいており、カーブや赤信号を知覚

していたのである。しかし、彼には、カーブや赤信号が見えているという意識が欠けていた。彼は、自分が特定の種類の視覚体験をしていたということに気づいていなかったのである。彼に欠けていたのは自分の心的状態に対する気づき(awareness)なのである¹。

われわれは、自分の心的状態のすべてに気づいているわけではない。私は、現在のアメリカの大統領がオバマという名前の人物であると信じているが、自分がそのような信念を持っているということを意識することはほとんどない。また、怒りやすさや、傷つきやすさのような心的性向に関しては、自分がそのようなものを持っているかどうかということさえ私にはよくわからない。知覚体験や感覚体験のような顕在的な心的状態に関しても、われわれがそのすべてに気づいているとは限らないように思われる。冷蔵庫の音が急に止んだのに気づくことによって、これまで冷蔵庫が鳴り続けていたのだと気づくということがあるだろう。そのような人は、冷蔵庫の音が鳴り続けていたことに気づかなかただけでなく、冷蔵庫の音が聞こえていたということにも気づいていなかったのではないだろうか。

アームストロングによれば、意識するとは、自分の心的状態に気づくことであり、自分の心的状態に気づくとは、自分の心的状態を知覚することである。冷蔵庫の音が聞こえていることに気づいているとき、その人の一階の心的状態を、その人の二階の心的機能が走査しているのである。視覚や聴覚のような外的世界を知覚する器官だけではなく、人間には、自らの心的状

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授 哲学

態を知覚する内部感覚(inner sense)が備わっているのである²。

しかし、われわれは、普通、自分の心的状態に気づいているという言い方はしない。私が車を運転しているとき、私が気づいているのは、赤信号の心像や対向車の心像ではなく、赤信号そのものであり、対向車そのものであるように思われる。アームストロングのような意識の高階理論は、センスデータ理論の焼き直しではないのだろうか³。

実際、ドレッキは次のように言う(Dretske, 1995, 2000)。意識状態(conscious states)の本来の機能は、信号や、オーボエや、バラのような外界の事物に気づかせることにある。意識的な心的状態とは、われわれがそれによって何かを意識することができるようになるものなのであり、われわれがそれを意識するようなものではない。それは、われわれが見たり、聞いたり、感じたりすることを可能にしてくれるものなのであり、それをわれわれが見たり、聞いたり、感じたりするようなものではないのである。

確かに、信号や、オーボエや、バラについてはそうかもしれない。それでは痛みはどうだろうか。痛みを感じるとは、痛みそのものを意識することではないとすれば、いったい何を意識することなのだろうか。ドレッキの答えは、それは身体の状態である、というものである。視覚体験が赤信号を意識させてくれるように、痛みは、胃の炎症や、足首の捻挫を意識させてくれるのである。視覚体験や痛みが意識的であると言われるのは、われわれがそれらを意識しているからではなく、それらによってわれわれが赤信号や胃炎を意識するからなのである。

しかし、ドレッキの見解もまた奇妙なものではないだろうか。われわれは、痛みを感じているとき、胃の痛みや歯の痛みそのものに気づいているのではないのだろうか。痛みが身体状態

に気づかせてくれるのは確かだとしても、それは、われわれが、痛みに気づくからに他ならないのではないだろうか。われわれは、胃の痛みに気づくことによって、胃が炎症を起こしているということを知るのであり、歯の痛みに気づくことによって、虫歯が進行しているということに気づくのである。それならば、視覚体験や聴覚体験などの場合も同じであるはずである。赤信号にわれわれは様々な仕方で気づくことができる。信号を見ることによって、音響付きの信号ならば、信号機が発する音を聞くことによって、あるいはまた同乗者の「赤信号だ」という声によっても。あるときにはわれわれは、赤信号が見えていることに気づくことによって赤信号に気づき、別のときには信号音が聞こえていることに気づくことによって赤信号に気づくのである。また、ある人は、バラが見えていることに気づくことによってバラが咲いていることに気づき、別の人は、バラの香りに気づくことによってバラが咲いていることに気づくのである。知覚器官が外界の情報をわれわれに伝えてくれるという機能を持つことは疑いのないことであるが、われわれが外界の状況に気づくのは、自らの知覚体験のあり方に気づくことを通してなのである⁴。

ただし、長距離ドライバーが、自分が運転を続けているという意識を待たずに長い間運転していたということに気づく、というアームストロングの例は、意識の高階性の例としては適当ではないかもしれない。レース中のレーシングドライバーは、他のマシンや路面の状況を注視し、エンジン音や車体の振動を感知することに注意を集中するだろうが、今レースの最中であるという意識を持つことはほとんどないだろう。彼は視覚情報や聴覚情報には気づいているが、自分がレースをしているというさらなる意識は持っていない。また、映画館で映画を見ている

最中に、ふとわれに返って、自分は今映画館にいるのだということに気がつくという体験をしたことのある人は多いだろう。その人は、それまで、スクリーンに映し出され、スピーカーから聞こえてくる世界に没入していたのである。長距離ドライバー、レーシングドライバー、映画の観客、三者ともに、今現在自分が置かれている状況についての意識を欠いているにもかかわらず、後の二者は、視覚情報についても、聴覚情報についても気がついている。今、自分が車を運転している最中であるという意識を持つことや、映画館で映画を見ている最中であるという意識を持つことは、自分の心的状態に気づくこととは別のことだからである。車を運転しているということは心的な状態ではないし、今、車を運転している最中であるということに気づくために、自分の心的状態に気づいていなければならぬというわけでもない。今日は水曜日だったと気づくために自分の心の中をのぞいてみる必要がないのとそれは同じである。

II HOT vs. HOP

心が二層構造をしており、一階の心的状態に二階の心的状態が関係することによって一階の心的状態が意識されるようになるのだとすれば、一階の心的状態が生じていることとその心的状態を意識することは別のことであるということになる。歯の痛みが生じていることと歯の痛みに気づくことは、意識の高階理論が正しければ、別のことなのであり、歯が痛いにもかかわらずそのことに気がつかないということもありうることなのである。宿題に集中していて歯の痛みを忘れてしまい、宿題が終わった途端に、歯の痛みに気づくといったときでも、歯の痛みは、宿題をしている間中続いていたのである。また、冷蔵庫の音が止まったことに気づくとき、その

人は、それまで冷蔵庫が鳴っていたということに気づくだけでなく、それまで冷蔵庫の音が聞こえていたということにも気づくのである。

意識の高階理論は二つのタイプに分類することができる。アームストロングのように、二階の心的状態を知覚に類似のものと考えた立場は、高階の知覚(higher-order perception)理論、あるいは HOP 理論と呼ばれることがある。それに対してローゼンタールは、二階の心的状態は一階の心的状態に対して、知覚的ではなく、思考的に関係していると考え、自らの理論を、高階の思考(higher-order thought, HOT)理論と名付けている(Rosenthal, 1986)。ローゼンタールによれば、われわれが何かを意識するとき、われわれは、それに関する何らかの思考を抱いているのであり、心的状態が意識されているとき、われわれは、自分がそのような心的状態にあるという思考を同時に持っているのである。歯の痛みを意識するとは、歯が痛いと思うことなのである。

一階の状態を思考するといっても、その思考は、直接的で、非推論的なものでなければならない。例えば、鏡で虫歯を見たり、歯科医の診断を聞いたりすることによって、自分は歯の痛みを感じているはずである、という思いを抱く人がいたとしても、その人は、そのときに歯の痛みを意識したわけではない。また、二階の思考は、常に意識されているわけではない。歯の痛みに気づいているとき、われわれは、必ずしも、自分が歯の痛みに気づいているということに気づいているわけではない。二階の思考に気づくには、三階の思考が必要である。アームストロングは、一階の心的状態が内部感覚の対象となったときに内観的意識が生じると考えるが、ローゼンタールにとって、真の意味での内観とは、三階の思考が二階の思考に向けられたときに生まれるものなのである(Rosenthal, 1993)。

内省的人間とは、自分が何を考えているかということについて自覚的な人間であるということである。それでは、HOT 理論と HOP 理論のどちらがより優れているだろうか。それとも、いずれも意識一般の理論としては不完全なものなのだろうか。あるいは、二階の心的状態は意識にとって無用の長物なのだろうか。

HOT 理論によれば、赤信号が見えていることに気づくとは、その人のうちに「赤信号だ」といったたぐいの思考が生じることである。満員電車で足を踏まれて「痛い」と言った人がいたとしよう。彼にとって、「痛い」と言うことがすなわち痛みに気づくことなのだろうか。そうではなくて、彼は痛みを感じたから、あるいは痛みに気づいたから「痛い」と言ったのではないだろうか。それとも、痛みについて考えることと「痛い」と言うことは別のことなのだろうか。それならば、「痛い」という代わりに、「痛い」と心の中でつぶやく場面を考えてもよい。彼が「痛い」と心の中で思わずつぶやいたのは、やはり、彼が痛みに気づいたからではないのだろうか。「痛い」と言う人は、うめくかわりにそうしているのであるとウィトゲンシュタインならば言うだろう。うめき声をあげる人は痛みに気づいているだろう。HOT 理論が正しければ、うめき声をあげることが痛みに気づくことであるということになるのだろうか。そうでないとならば、うめき声をあげる前に、彼の心には痛みに関する思考が生じていたとでもいうのだろうか。それとも、うめき声をあげた時点では、彼はまだ痛みに気づいていなかったのだろうか。

ある種の意識には思考が伴うということは確かなことかもしれない。赤信号に気づいた人には、「あ、赤信号だ」という思考が生じているのかもしれない。少なくとも、「今の信号の色は何色か」と問われれば、「今は赤だ」答えることができるだろう。何かを意識している人は、意識

の対象に関して言語的報告ができることだろう。しかし、だからと言って、何かを意識することはそれについて思考することである、ということになるとは限らない。思考は意識の結果かもしれないからである⁵。さらに、すべての意識に思考が伴うということは考えにくいことである。例えば、ポストが見えていることに気づいている人は、いくつの思考を持っていることになるのだろうか。ポストに気づいている人は、ポストが赤いことや、四角に見えることや、道路の右側にあることや、大人の身長よりも低いことにも気がついているだろう。ということは、その人の心にこれらの思考が一举に生じているということだろうか。また、われわれは、目覚めている限り、視覚体験の細部には気づいていないとしても、見えているということには気づいているだろう。われわれは、起きてから寝るまでの間、物が見えていると考え続けているのだろうか。

では、HOP 理論ならば、意識という現象をうまく説明してくれるだろうか。アームストロングと並ぶ HOP 理論の代表者と目されているライカンは、意識が思想的であるよりも知覚的であることの理由として、われわれが、自らの心的領域のどの部分を意識にもたすかということに関して意図的に選択できる、という点を挙げている(Lycan, 1996, 2004)。例えば、置時計の秒針の音に注意を向けた後、胃の様子を観察し、次いで、視野の中心に現われている像を注視するというように、われわれは、内観の対象を変えて行くことができる。このように内観の対象が変わって行くにつれて、それまで意識されなかったものが意識されるようになるだろう。意図的に注意の方向を変更できるというこうした能力は、内的なモニターやスキャナーのような内観のシステムがわれわれに備わっていると考えることによって説明される、とライカ

ンは言う。知覚器官によって外界について知ることができるように、内観の器官をつかって、われわれは自分の心の状態を探查することができるのである。そして、内観のサーチライトに照らし出された対象が意識に上ることになるのである。

では、外部知覚の場合、注意を向けるとは何をすることなのだろうか。視覚ならば、それは、注視したい対象が視野の中心に来るように眼球や顔を動かしたり、対象に近づいたり、目を見開いたり、あるいは、目を細めてみたりするといったことだろうし、聴覚ならば、音源のほうに顔を向けたり、耳の後ろに手を当てたり、あるいはやはり、音源に近づいたりするといったことだろう。よく見たり、よく聞いたりするために身体を動かすのである。そして、身体の動きに伴って、風景はがらりと変わり、音は大きくなり、鮮明さを増すだろう。

われわれが内観の機能を備え、それをある程度自由に操作する能力を持つということの例としてライカンが挙げているのは、感覚領域間にまたがって注意の対象を変更するケースであるが、外部知覚におけるように、単一の感覚領域の内部で内観の対象を変えるということは可能だろうか。視覚体験の場合は、視線と焦点を固定したまま、視野の中で注意の方向を変えるということは想像しにくいかもしれないが、聴覚体験ならば次のようなケースが考えられるだろう。部屋で音楽を聴いているとしよう。スピーカーの隣には置時計が置いてあって、秒針の音が絶えず鳴っている。日ごろ、秒針の音に気づくことはないが、それに注意を向ければ、たとえ聴覚器官の状態に変化がなくても、気づくことができるだろう。秒針の音に気づくことによって、聴覚体験の質が一挙に変わるわけではないが、それまで埋もれていた秒針の音が前面に飛び出し、音楽は背景に退くように感じられる

だろう。ただし、こうした注意機能は、完全にわれわれの意のままになるというわけではない。一度意識に上った秒針の音は、音楽に集中しようと思っても、意識の前面から退くとは限らない。コンサートホールにおいて、音楽を聴くことに集中しようと思えば思うほど、聴衆の咳払いの音が気になり出すということはよくあることである。しかし、いつの間にか、音楽を聴くことに没入し、咳払いの音が気になくなって行くだろう。外のものに注意を向けることに比べて、自らの心に注意を向けることはよほど難しいことなのである。

外部の対象をよりよく見るために、われわれは、意図的に視線を移動させ、焦点を合わせる。同じように、われわれは、自分の知覚体験をより鮮明なものとするために知覚内容に注意を集中する。前者は身体運動を含むのに対して、後者においては身体的変化は生じないという違いはあるものの、ライカンが言うように、両者の構造上の類似は明らかであるように、一見したところは、思われるかもしれない。ただし、内観することと外界の対象に注意を向けることは完全に同じというわけでもない。視線の方向を変えれば、それに応じて風景は変化し、音源に近づけば、それに応じて聞こえてくる音は大きく、鮮明になる。しかし、内観のサーチライトの照らし出す対象が変わったからといって、体験の質が変わるわけではない。秒針の音に注意を向けることによって、それまで気づかれなかった音が聞こえてくるようになるという現象に類比されるべきなのは、視覚体験においては、おそらく、反転図形の例である。一つの図形がアヒルに見えたりウサギに見えたり、壺に見えたり人の横顔に見えたりするということがある。アヒルを見ようと意図することによってアヒルを見ることはある程度はできるが、やがて、意図を裏切って、ウサギが見えてきてしまう。図

と地が反転したのである。図と地が反転しても、見えている形が変わるわけではない。壺と横顔の場合も、壺が見えているときと横顔が見えているときでは、見えている色が変わっているわけではない。また、寝そべって夜空の星を眺めているうちに、星々が白鳥やひしゃくやサソリの形に見えてくることもあるだろう。しかし、星の配置の見え方が変わったのではない。無秩序に見えていた星の塊から図が凝集してきたのである。秒針の音の場合も、秒針の音に気づいたときに、スピーカーから聞こえてくる音楽の音の高さや音色が変わってしまうわけではないだろう。それまで地として背景に潜んでいた秒針の音が図となり、ときによっては耳から離れなくなるのである。注意は対象を図化する機能を持つのである。

ライカンが挙げる感覚領域間における注意の移動の場合についても同じことが言えるだろう。われわれは同時に、音が聞こえ、物が見え、においがし、痛みやかゆみを感じ、何かに触れているのを感じている。そして、これらの現象野(phenomenal fields)のどれに注意を向けることもなくぼんやりと過ごすこともできるし、そのうちのひとつ、あるいは複数のもに注意を向けることもできる。聴覚体験に注意を向ければ、鳥の鳴き声が浮かび上がってくるし、背中
の感覚に注意を向ければ、いすの背もたれの接触が浮かび上がってくるだろう。このように、注意を向けることが意図的である場合、それは、よく見るために眼球を動かすことが身体的行為のひとつであるように、心的行為の一種とみなすことができる。また、音楽を聴いている最中に、虫歯か急に痛みだし、聴覚体験が後景に退くということもあるだろう。このように、注意機能は体験の質や強度の急激な変化によって誘発されることもある。注意を向けることが意図的であろうと、そうでなかろうと、いずれにし

ても、注意のサーチライトによって照らし出された部分が図となり、それ以外の領域は背景化するということに変わりはない。しかし、HOP理論がうまく行くのはここまでである。見たり聞いたり、痛みやかゆみを感じたりすること以外にも、われわれの中では様々なことが生じている。そして、そのうちのいくつかについては、それらが生じているということをわれわれは意識している。HOP理論もHOT理論も、こうした知覚体験や感覚体験以外の心的状態についての意識を説明することはできないように思われる。

Ⅲ 考えること、思い出すこと

私は今、意識の問題について考えている。私は意識の問題について考えているということを知っている。単に、意識という主題をめぐって私の思考がさまよっているということを知っているだけでなく、意識をめぐってどのようなことを考えているかという思考の内容についてもよく知っている。しかし、私は、自分が考えていることに常に気づいているわけではない。私は、何を考えているかということだけでなく、何かを考えているということにさえ気づかないことがある。人と話しているときを除けば、どうやら、私の心の中では様々なとりとめのない思いが内語の形で絶えず浮かんでは消えているらしい。そのことは、ふとわれに返って、今このようなことを考えていたのか、と思うことによってしか知ることができない。そして、いつわれに返っても、私はとりとめのないことを考えていたということに気がつく。それでは、私が今、意識の問題について考えているということを知っているのは、HOP理論が言うように、私が、自分の思考に注意を向けているからだろうか。また、日頃のとりとめのない思いに注意

を向ければ、私は、自分が何を考えているかということ意識することができるようになるのだろうか。しかし、私には、自分の心をよぎる思いに注意を向けるためには何をどうすればいいのかよくわからない。また私は今、自分が意識の問題を考えると同時に、考えるという心的状態、あるいは心的出来事に注意を向けているわけではない。意識の問題について考えながら、注意機能のサーチライトを、考えることからそらすということがどのようなことをすることなのか、私にはやはりわからないからである。私が今現在していることと言えば、単に意識の問題について考えることだけである。

それでは、HOT 理論が主張するように、意識の問題について考えているのと同時に、私のうちに、自分が意識の問題について考えているという無意識の高階の思考が生じているのだろうか。高階の思考は、意識の問題について考えているという私の一階の思考の主題についてのものなのだろうか。それだけではないだろう。先に述べたように、私は、意識の問題について考えているということだけではなく、意識の問題についてどのようなことを考えているかということも知っているからである。それならば、高階の思考は、低層階の思考を一語一語なぞっているのだろうか。あるいは、それがあまりにも膨大な労力を必要とするならば、低層階の思考によって思考されている思考内容を直接思考しているのだろうか。そうすると、低層階の思考と高階の思考は完全に重なり合うことになるだろう。いずれにしても、思考が意識的であることを説明するために高階の思考を持ち出すのは無駄なことである。

おそらく、われわれには思考に注意を向けることができないのである。考えることに意識を集中させる、という言い方をすることはあるかもしれないが、実際にできることは、考えるこ

とに内観のサーチライトを向けることではなくて、集中して考えること、つまり、一生懸命考えることである。そして、一生懸命考えているときには、自分が考えているということも、何を考えているかということも、本人は知っているのである。しかし、一生懸命考えることは、やはり簡単なことではない。意識の問題を考えようとしても集中できずに、さまざまな想念が頭の中に湧いてくるということは、私が日ごろ経験していることである。

ピーコックは、注意の対象と注意を占有しているものを区別したうえで、意識的な思考には注意の対象が存在しないと言う (Peacocke, 1998)。知覚の場合、注意の対象は、信号やピアノのような知覚対象である。思考においては思考の対象は存在するが、思考の対象は知覚の対象ではないゆえ、注意の対象とはなりえないのである。思考に注意の対象が存在しないにもかかわらず、思考が意識的でありうるのは、ピーコックによれば、思考が注意を占有しているからである。しかし、思考には注意の対象が存在しないと言うよりも、思考は注意の対象となることができないと言ったほうがより正確であるように思われる。

思い出すことも、また、考えることと同様、HOP 理論に対する反例となるような心的状態である。小学校一年生の時の担任の先生はメガネをかけていたかどうか、と問われれば、担任の先生の顔を思い出し、すぐさま、かけていなかった、と答えることができるだろう。想起は言語的である、という説があるが、誤りである。われわれは、像的に想起し、それを手がかりに、メガネをかけていなかったと判断するのである。子供のころの部屋には窓がいくつあったか、といった、より複雑な問いに答える場合を考えれば、そのことはより明らかとなるだろう。子供部屋には窓が9枚あった、といった形で言語的

な記憶を持っている人はまれであろう。少なくとも私は、当時の部屋の模様を像的に思い浮かべ、窓の枚数を一枚一枚数えて行く。それも、一挙に思い出すのではなく、最初に東側の像を思い浮かべ、次に南側、そして西側と、順番に思い浮かべて行く。その過程で、外壁の色は茶色であったこと、天井の模様が人の顔に見えていたこと、弟の机の前にボーイング747型機のポスターが貼ってあったことなども思い出すだろう。私は子供部屋の様子を思い出そうという意図は持っていたが、茶色の壁を持った、窓が9枚ある部屋を思い出そうという意図を持っていたわけではない。それらのことは、子供部屋の像を思い浮かべた結果、私の知ることとなった事柄である。

想起がすべて意識的であるわけではない。過去の像が断片的に浮かんでは、気づかれる間もなく消える、ということはあるそうなのである。しかし、意図的に過去を想起しているとき、われわれは、自分が過去を想起しているということを知っているし、思い浮かべられた像の特性についても気がついている。私は、今、自分が小学生のころの部屋を思い出しているということを知っているし、思い浮かべられた外壁は茶色であるということにも気づいている。では、自分が小学生のころの部屋の様子を思い出している最中であるということを知っているとき、私は、自らの想起体験に注意を向けているのだろうか。また、外壁の色が茶色であると気づいたときに、私は思い浮かべられた像の外壁の部分に注意を向けていたのだろうか。

想起像の特定の部分に注意を向けるということは可能なことなのだろうか。思い浮かべられた南側の窓のうち、真ん中の窓に注意を向け、次いで右隣の窓に注意を移そうとしても、できることはと言えば、真ん中の窓を中心とした像を思い浮かべ、次いで、右側の窓が大写しにな

った像を新たに思い浮かべることだけである。想起像には、中心と辺縁の区別がない。一様に鮮明であるか、一様におぼろげであるか、いずれかである。だからわれわれには、想起像の特定の部分に注意を向けるということができないのである。また、思い浮かべられた部屋の様子に注意を向けた後、そこから注意をそらすということもできない。思い浮かべられた像から注意をそらすことは、部屋を想起することをやめることである。視覚像を思い浮かべる場合、われわれは、目の前に視覚像を呼び出し、それを心の目で見る、ということをしているわけではない。過去の見えを思い出しているだけである。想起像に注意を集中することなど端からできないことなのである。われわれにできるのは、やはり、真剣に思い出そうとすることだけである。

これは、想像についても言えることである。例えば、歯の痛みを想像しながら、想像された歯の痛みから注意をそらすことはできない。痛みを想像することが、想像上の歯の痛みを作り出し、それを感じる、ということではないからである。歯に痛みが生じているか、痛みが生じていないか、われわれに想像できるのはそのいずれかである。

想起の対象に注意を向けることができないように、われわれには、想起体験そのものにも注意を向けることができない。われわれが考えることに注意を向けることができないのと同じことである。それでは、なぜ、思考や想起に注意を向けることができないのだろうか。そして、注意を向けるとはそもそもどのようなことなのだろうか。

われわれは、ベートーヴェンの交響曲を聴きながら宿題をすることはできるが、ベートーヴェンの交響曲を心の中でなぞりながら意識の問題について考えることはできないし、大学の卒業式のことを思い出しながら現在のバクダッド

の様子を想像することもできない。また、スピーカーから聞こえてくるピアノの音の音色の移り変わりに注意を向けながら、哲学の問題を一生懸命考えることはできそうにないし、哲学の問題を考えているうちに歯が痛み始め、歯の痛みを気に取られてしまえば、考えることはおろそかになってしまうだろう。このように、われわれには、並行して行うことができないようなことがいくつかある。ピーコックによれば、意識的な思考や想像、知覚的、感覚的注意が相互に排他的なのは、人間には、注意の器官が一つだけ備わっていて、その器官を占有することができるのは一つの状態のみであるからであるという。哲学の問題を考えている間は思考が注意を占有し、歯の痛みを気に取られると思考は押し出され、代わって痛みが注意を占有することになる、というわけである。哲学の問題を考えたり、子供のころを思い出したりしている人は、すでに注意器官を使用しているのであり、それに加えて、思考に注意を向けるということは、もともとできない相談なのである。

しかし、ピーコックのこうした仮説には据わり心地の悪いところがある。秒針の音や赤信号に注意を向けるとき、秒針や赤信号は注意の対象である。秒針や赤信号は、注意の対象であるとともに、思考や想起と同じ資格で、注意の占有者でもあるのだろうか。それらが注意の占有者ではないとすれば、秒針や赤信号に注意を向けているとき、いったい何が注意器官を占有しているのだろうか。おそらく、それは聞くことや見ることである、ということになるだろう。考えることや思い出すことに対応するのは、秒針や赤信号ではなく、聞くことや見ることであるからである。秒針や赤信号は、思考や想起の内容に相当するだろう。それならば、注意の器官も、内部感覚も、高階の思考も、一切合財ぬきで、意識を説明することができるのではない

だろうか。

われわれは、考えることに集中しているときには、自分が考えているということも、何を考えているかということも知っている。昔のことを思い出すことに集中しているときには、自分が思い出しているということも、何を思い出しているかということも知っている。同じように、われわれは、見たり聞いたりすることに集中しているときには、自分が見たり聞いたりしているということも、何が見え、何が聞こえているかということも知っているのではないだろうか。見たり聞いたりすることに集中する、と言っても、見ることや聞くことに何かを集中させるといわけではない。真剣に見、一生懸命聞くということである。視覚体験に注意を向け、聴覚体験に注意を向けるということは、見ることに集中し、聞くことに集中することであり、信号や秒針の音に注意を向けるとは、信号を見ることに集中し、秒針の音を聴くことに集中することの別名である、とみなすことができるだろう。

見ることや聞くことに集中することはできるかもしれないが、では、痛むことに集中することはできるのだろうか。目を閉じればいやなものを見なくてすむし、聞きたくないことには耳をふさげばよいが、痛みは、本人の自由になることではない。痛むとき、痛む人は完全に受動的である。だから、痛むことに集中したり、真剣に痛んだりすることはできそうもないことのように思われるだろう。ただ、痛みに敏感になることならできるだろう。体調が気になって仕方がない人は、変調の兆しを逃すまいと神経を研ぎ澄ますだろう。そのような人は、痛みにも真剣なのであり、真剣に痛んでいるのである。また、痛むことに真剣ではない人でも、歯に激痛が走れば、いやでも痛みにも集中せざるをえないだろう。よく見、よく聞くことが、視覚対象や

聴覚対象と視覚器官や聴覚器官の関係を調整することだとすれば、真剣に見、真剣に聞き、真剣に痛むことは、視覚機能や聴覚機能や感覚機能を活性化させることであり、視覚機能や聴覚機能や感覚機能を鋭敏にすることである、と言ってもよいかもしれない。

意識的な思考と知覚対象に対する注意が両立しないというピーコックの指摘も、常に妥当するというわけではない。ベートーヴェンの交響曲に聴き入りながら意識の問題について熟考することはできないが、演奏会評を書こうとしている音楽評論家は、指揮者の動きとオーケストラの響きに注意を集中すると同時に、指揮者の意図を推し量り、演奏を語る言葉を紡ぎ出そうと努めるだろう。彼は、見ることと聴くことと考えることに集中しているのである。また、歯科医に歯をドリルで削られながら、60数えるうちに削り終えるだろうと期待して、心の中で数を数えながら痛みに耐えている人は、歯の痛み気づいていると同時に、自分が今どの数まで数えたかということも知っている。一般に、知覚体験と思考や想像が何らかの関連性を持つときには、知覚的注意と意識的思考は両立可能である。われわれは、ある状況下では複数のことに同時に集中できるのである。

IV 意識の不可謬性

自らの心的状態に気づくという現象を説明するために、高階の心的状態を仮定することが自然に見えるのは、気づきが生じるためには、気づかれるものと気づくものがなければならぬと思われるからである。しかし、痛み気づく場合、私の中の高次の心的状態が痛み気づくわけではない。気づきの主体があるとなれば、それは私の心の一部ではなく、私自身である。哲学の問題について考えているときには、哲学

の問題について考えていることに私が気づいている、という言い方さえ不自然である。私は哲学の問題について考えていると同時に、そのことに気づいているというわけではない。私は哲学の問題について考えているだけであり、その思考が意識的であるのである。あるいは、哲学についての意識的思考が私に生じているのである。

ここで提案されている心のモデルは、意識を説明するために二階の心的状態を仮定しないという意味において、意識の高階理論と異なるとともに、すべての心的性質が志向的であるというわけではない、と考える点において、ドレツキのような一階の表象主義とも異なるものである。こうした心のモデルは、意識の諸問題について以下のような見通しを与えてくれるだろう。

われわれは、自分のすべての心的状態に気づいているわけではない。何が見えているか、痛みが生じているかどうか、どのような考えが浮かんでいるか、気づいていない、ということは、常日頃生じていることである。われわれは、自分でも気づかぬうちに、さまざまなことを思い、さまざまな知覚体験をしているのである。

また、ある状態が意識的であるか否か、という問いに明確な答えが与えられないようなケースが存在しうる。意識の高階理論や、注意のための器官の存在を仮定するピーコックのような立場が正しければ、ある状態が高階の知覚や思考の対象になるか、あるいは注意器官を占有している場合には、それは意識的であるということになる。しかし、考えることに集中しているときには思考が意識的となり、見ることに集中しているときには視覚体験が意識的になるのだとすれば、意識にも集中の度合いに応じた明晰さの度合いがあるということは考えられることである。例えば、歯に鈍い痛みがありながら、幾何学の問題を解くことに集中しているような

場合、その人は歯の痛みを感じているのだろうか。ピーコックやライカンやローゼンタールならば、気づいているか気づいていないか、二つに一つであると言うだろう。では、痛みを感じていないにもかかわらず痛みが続いている場合と、痛みが存在しない場合の違いを、本人は区別することができないのだろうか。問題を解くことに集中していても、だれかに、あなたは歯が痛いのではないかと問われれば、痛い、と即座に答えることができるかもしれないし、また、すぐには答えられないようなときもあるだろう。では、即答できる人の痛みは、だれも問う人がいない時にも意識的であり続けているのだろうか。また、音楽を熱心に聴いている人は、今聞こえているのがチェロの音であり、あるいは、クラリネットの音である、ということに気づいているだろう。一方、音楽を聴きながら哲学の問題を考えているときには、その人は、ヴァイオリンの音が聞こえているのかチェロの音が聞こえているのか気づいてはいないかもしれない。それでも、その人は、音楽が聞こえているということには気がついていよう。

痛みがあるにもかかわらず痛みが気がついていないということはあるが、痛みに気づいているにもかかわらず痛みが生じていなかったり、痛みを感じているのに実際に生じているのはかゆみである、といったことは、この心のモデルが正しければ、ありうることではない。痛みを感じていれば実際に痛みが生じているのである。痛みが生じていることと痛みに気づくことは一つの同じ出来事だからである。

デカルトによれば、私が今、光を見、音を聞いているということは誤っているかもしれない。私は夢を見ている最中かもしれず、悪しき霊が私を欺いているかもしれないからである。しかし、今、私が光を見ていると思ひ、また音を聞いていると思っているということは誤りではな

い。デカルトは、外界の対象についての判断は誤りうるが、自分の心についての認識は誤ることがない、と考えたのである。そして、デカルトの言うような、自己の心的状態についての認識の不可疑性や不可謬性が成立するか否か、ということは、意識の哲学の重要問題であり続けている。しかし、私が今、光を見ていると思っているということは誤りえない、と言うとき、デカルトがどのようなことを念頭に置いていたのかは必ずしも判然としない。「私が光を見ていると思っているならば、私は光を見ていると思っているのだ」という意味ならば、それは、「上野動物園にパンダがいるならば、上野動物園にパンダはいる」と同様、単なる同語反復である。あるいは、デカルトは、私が光を見ていると思っているということは、私の心に関する端的な事実なのだ、と言いたかったのかもしれない。部屋の真ん中にテーブルがあるということが、私の部屋とテーブルに関する端的な事実であるように、私の心にも端的な事実があるはずである。そして、事実は成立したりしなかったりすることはあっても、真であったり偽であったりすることはない。誤謬の可能性を持つのは事実に関する信念であって、事実そのものではないからである。その意味において、私が光を見ていると思っているという事実も誤ることではないのである。しかし、私が思っている、あるいは私が考えている、という事実が成立しているということを私はどのようにして知ることができるのだろうか。私は、悪しき霊が自分を欺いているかもしれないと自分が考えているということをどのようにして知るのであるか。デカルトは、整合的であろうとするならば、この問いを拒否すべきなのである。私は自分が考えているということを知っているのではない。私は自分が考えていると思っているのではない。私は考えているのである。そして、考えている限り私

は存在するのである。だが、おそらく、一般的な解釈は、デカルトの言う不可謬性は、自分の心についての思いは誤ることがないということである、というものだろう。すると、「私が光を見ていると思っているということは誤ることがない」とは、正確には「私は光を見ていると思っていると思っているならば、実際に私は光を見ていると思っている」ということを意味することになるだろう。

意識の高階理論は、もちろん、最後の意味における不可謬性を否定する。見間違いや聞き違いがあるように、高階の状態というものがあるとすれば、それが一階の状態を捉えそこなうという事態はありそうなことだからである。そして、確かに、自分の心的状態について、ある種の思い違いをするということは考えられることである。私は、頭痛を頭のかゆみと取り違えているかもしれない。私は、おそらくかゆみの概念を理解していないのである。今の私のこの状態を、人々はかゆみと呼ぶのだ、と私は誤解しているのである。また、私は現在、哲学の問題について考えていると思っているが、実際に私が考えているのは、哲学ではなく似非哲学に属する事柄かもしれない。私は、哲学とは何かを理解していないか、自分の思考の価値を過大に評価しているのである。あるいは、自分が行っているのは考えることではなく、夢想することであるのかもしれない。私は、哲学的に考えるとはいかなることであるのかということについて誤解しているのである。しかし、痛みを感じているときには実際に痛みが生じているという主張と、こうした誤謬の可能性は矛盾するものではない。それは次のようなことを意味している。

私が自らの感覚体験に気づいているならば、私は気づかれている通りの体験をしている。それが痛みと呼ばれるものであろうと、あるいは

かゆみと呼ばれるものであろうと、私が何かを感じていることに気づいているならば、私には実際にそのような感じがしているのである。私が何かが見えていることに気づいているならば、私には、気づかれている通りに見えているし、私が何かがかんかえていることに気づいているならば、私には気づかれている通りに聞こえている。私が、自分が思考していることを意識しているときには、意識している通りのことを私は考えているのであり、想起について意識しているならば、私は意識している通りのことを思い出しているのである。誤謬が生じるのはそのあとのことである。私は聞こえてくるヴァイオリンの音をヴィオラの音と取り違えるかもしれないし、幻痛を現実の体の損傷によって引き起こされた痛みと思ひ込むかもしれない。意識の可謬性ということによって、高階理論の論者が、今、私にはある光景が見えているように思われるが、実際には違ったように見えているのだ、といった種類のことを言おうとしているのだとすれば、それは理解不能なテーゼである。今の私の視覚世界は、私に今見えていると思われている通りのあり方をしているのである。

私は歯の痛みを感じている。私は、哲学の問題について考えているということを意識している。だから、実際に私は歯が痛いし、実際に私は哲学の問題について考えている。しかし、私は本当に気づいたり意識したりしているのだろうか。気づいていると思っているものの、実際には気づいていなかったり、意識しているもの、実際には意識していなかったり、といったことはありえないことなのだろうか。私が何かに気づいているということを知るには、気づいているということに気づいていなければならないのではないだろうか。そうであるとすれば、気づきについての気づき間違いが、少なくとも論理的にはありうることになる

だろう。また、そうでないとすれば、いったい何が私の気づきが本物であることを保証するのだろうか。

私は歯の痛みに気づいていると思っている。この思いが誤りであるとは、今、気づいていると思っているこの歯の痛みはそのまま存在しているにもかかわらず、実際はこの歯の痛みに気づいていないということである。このようなことは私には理解できない。気づきは透明だからである。痛みは気づき、冷蔵庫の音が聞こえていることに気づき、赤信号が見えていることに気づくとき、三つの気づきが共通に持つ性質というものは存在しない。気づきはさらなる気づきの対象となるようなそれ独自の性質を持ってはいない。だから私には、気づきそのものに気づいたり、気づきについて気づき間違いをしたりするといったことが想像できないのである。

他方、気づいていることに気づくという事態が成立しているように思われる状況が存在することもまた確かである。例えば、私が、歯が痛い時に「歯が痛いか」と聞かれれば、「痛い」と答えるだろう。私が「歯が痛い」と答えるということは、私が歯の痛みに気づいているということである。それゆえ、「それではあなたは歯の痛みは気づいているのか」とさらに聞かれれば、私は「気づいている」と答えることだろう。私が、「歯の痛みは気づいている」と答えるということは、私は歯の痛みは気づいていることに気づいているということである。したがって、「あなたは歯の痛みは気づいていることに気づいているのか」とさらに聞かれれば、「気づいていることに気づいている」と答えることになるだろう。しかし、この問答が百回続けば、私の心には百階の心的状態が形成されることになるなどとは、高階の意識理論の支持者でも考えはしないだろう。痛みは気づいている人が、痛みは気づいていることに気づくことができるというこ

とは、気づきに関する現象学的事実ではなく、「気づき」という語に関する文法的な事実である。

それでは、私が今、歯の痛みは気づいているということは、私の心についての端的な事実なのだろうか。今、私が存在している、ということが事実ならば、おそらくそうである。今、私が存在しているならば、私は今、確かに歯の痛みは気づいている。そして、確かに、私は歯が痛いのである。

注

- 1 意識という言葉は様々な意味で使われる。「けが人の意識が回復した」という場合や、「鳥にも意識があるか」という場合の意識と、「試合中、私は、足の痛みを意識していなかった」という場合の意識は異なる。本稿で取り上げるのは後者である。これは、人が自分の心的状態を意識していると言われる場合の意識で、ローゼンタールが状態意識(*state consciousness*)と呼ぶものである。また、「意識する」と「気づく」を本稿では同じ意味で用いることにする。
- 2 意識を内部知覚とみなす立場はロックを先駆とする。ロックは、意識とは自分の心の中で生じるものの知覚であるという(Locke, 1975, Book II, Chap. I)。ただし、ロックの内部知覚は常に機能していて、休むことはない。
- 3 ブロックも、アームストロングやライカンはセンスデータ理論に加担することになるのではないかと疑念を呈している(Block, 1995)。
- 4 ドレツキのような表象主義に対する批判については、星野(2004)を参照されたい。
- 5 ライカンも、気づきが気づきの対象についての思考に先立つ、と考えるほうが、直観に合致しているだろうと指摘している(Lycan, 2004)。

文献表

Armstrong, D. M.(1968), *A Materialist Theory of the Mind*, Routledge. (『心の唯物論』、鈴木登訳、勁草書房)

- Block, N. (1995), “How Many Concepts of Consciousness”, in Block (2007).
- Block, N. (2007), *Consciousness, Function, and Representation*, MIT Press.
- Dretske, F. (1995), *Naturalizing the Mind*, MIT Press.
- Dretske, F. (2000), “Conscious Experience”, in Dretske (2000).
- Dretske, F. (2000), *Perception, Knowledge and Belief*, Cambridge University Press.
- Gennaro, R. J. ed.(2004),*Higher-Order Theories of Consciousness*, John Benjamins Publishing Co.
- 星野 徹(2004)、「表象主義とクオリア」、『埼玉大学紀要 教養学部』第40巻(第I号)。
- Locke, J. (1975), *An Essay concerning Human Understanding*, ed. by Peter H. Nidditch, Oxford University Press. (『人間知性論』、大槻春彦訳、岩波書店)
- Lycan, W. G. (1996), *Consciousness and Experience*, MIT Press.
- Lycan, W. G. (2004), “The Superiority of HOP to HOT”, in Gennaro(2004).
- Peacocke, C.(1998), “Conscious Attitudes, Attention, and Self-Knowledge”, in Wright, Smith, and Macdonald, eds. (1998).
- Rosenthal, D. M. (1986), “Two Concepts of Consciousness”, in Rosenthal (2005).
- Rosenthal, D. M. (1993), “Thinking that One Thinks”, in Rosenthal (2005).
- Rosenthal, D. M. (2005), *Consciousness and Mind*, Oxford University Press.
- Wright, C., Smith, B. C., and Macdonald C. eds. (1998), *Knowing our own Minds*, Oxford University Press.